

二

ユースで報道される大半は、悲しい事柄です。文字にしたら当たり前にも感じますが、そんな事実を認識したのは、遅ればせながらアナウンサーの職に就いてからでした。親が見ていたニュースを隣りで眺めていた子供の頃からニュースは生活の中にあって、今日の世の中が何となく分かったような気がする以外、特別に意識したことなどなかったからかもしれません。

実際ニュースは出来事の羅列なのですが、伝える側になってみて、何をニュースに選ぶか、何がニュースとして求められているのかなど判断や基準の全ては人で、それぞれの事件や事故といったニュースの主人公も全て人だという事実を初めて強く意識しました。淡々と流れるニュースの全ての要素は人に発し、人にまつわり、人がどうしていくかに終始する生身の断片のようだと、それ以来感じています。

だから、嬉しいことや喜ばしい出来事の中にはありますが、ニュースには圧倒的に悲しい出来事が並びます。人が起こしてしまった、人にまつわる辛く悲しい事柄。それを聞いてどう受け止められるかは見ている方それぞれ

の領域なので、伝え手としては出来るだけニュートラルにフラットにお伝えしよう

と心がけるのなのですが、何も感じないかというと……やっぱり、そんな

ことはないのです。悲しさややるせなさの芯みtainいものが身体のどこかにしばらく残るような感覚といったらいのかもしれない。

ニュース原稿を読むほどに行き場のない思いが溜まってしまふ時、帰り道の電車や車の窓から見える街の灯りが、何だかとても特別に感じられたのを覚えています。本当にありき

街の 灯り

物語

温もりが見えるとき――

「何でもない日、ありがとう」

渡辺真理

アナウンサー

たりなのですが、夜、家々の窓から漏れる灯りほどあたたかそうでホッとするものはないですね。灯りは自然に点くものじゃなくて点す人がいるから、そこに温度が生まれる――その灯りのものとの暮らしが、どうか幸せでありますようにと遠くから勝手に祈るような気持ちで車窓を過ぎていく灯りを見ていました。

歴史番組でタイタニックを特集した時に知ったのですが、沈む二分前まで船の灯りは点いていたそうです。船の最下部で不休で働いていた火夫たちは、その時代、火を熾し灯りを点す職業に非常な自負を持っていたとか。沈没すると知ってからも、職場を放棄して逃げる道を選ばなかった火夫たちは最後まで火を点し、船とともに沈んでいったそうです。

百年以上経った今も、一日を無事過ごして帰り着いた家でパチンとスイッチをいれた時に点く灯りは、何人もの手を経て点されているんですね、意識することなんてないんですけれど。

二年前の東日本大震災で灯りがなくなり一面の闇が広がる東北の町を見た時に、そう実感された方も多かったのではないかと思います。普段意識することはなくても、灯りは人の生活の支え以上に心の支えになっているんですね。そして、今この時も東日本大震災の被災地では少しでも多くの灯りを戻そうと努めている人たちがいる……。灯りは唯一、目で確かめられる温もり。灯りが戻ったとき、そしてそのひとつひとつの灯りの半径数メートルが幸せであつたら、きっと今日よりも良い時間を明日へと手渡していける気がしています。

こうして文字にするとありきたりに思えるものですが、何でもない日の何でもない小さな灯りを心底、大事に点していきたいと願っています。

隣

わたなべ まり アナウンサー
1967年神奈川県生まれ。国際基督教大学教養学部卒。90年TBSにアナウンサーとして入社後「モーニングEye」「筑紫哲也NEWS23」等の番組を担当。98年に同社退社後フリーに。テレビ朝日『ニュースステーション』に番組終了まで出演。現在は、NHK BSプレミアム『BS歴史館』BS朝日『恋するドライブ』などTV/ラジオで活躍するほか、「ほぼ日刊イトイ新聞」でエッセイ連載。渡辺真理のウェブサイト
www.watanabemari.com

